

体外受精 ～自費診療から保険診療へ

札幌市医師会

さっぽろARTクリニックn24

ふじもと
藤本

たかし
尚

2022年4月1日から、それまで自費診療であった高度生殖医療（一般的には体外受精と認知されていると思います）が保険診療となりました。これは当該医療を行っている身としてはとても大きな変化でした。また事前になかなか情報がなく準備もできずに全国の不妊治療の病院／クリニックが混乱する事態となりました。クリニックが混乱するくらいですから、患者さんも大変混乱されました。

まずは、最近はやりのAI（人工知能）であるChatGPTに聞いてみます。

質問：日本における2022年からの体外受精の保険適用についてメリットとデメリットを教えてください

ChatGPTの返答

【メリット】：低所得層でも子どもを持つ機会が増える可能性がある。従来、高額な治療費用がかかるため、経済的な理由で子どもを望んでも実現できなかった人々にとって、保険適用になることで治療費用が軽減され、子どもを持つ可能性が増えることが期待できます。妊娠しにくい女性の支援につながる。体外受精は、女性の妊娠しにくい状況や男性の不妊症による問題を解決するために行われる治療のひとつです。保険適用により、妊娠しにくい女性の治療における支援が期待できます。

【デメリット】：医療費の増加。保険適用によって、治療費用が軽減される一方で、体外受精に関する治療費用は高額であり、保険適用によって医療費の負担が増加することが懸念されます。妊娠の可能性が低い人が治療を受けることになるリスク。保険適用によって、治療を受ける人が増えることになりませんが、治療を受ける人の中には、妊娠の可能性が低い人も含まれる可能性があります。そのため、適切な検査やカウンセリングが必要であり、それが不十分な場合には、不必要な治療が行われることになるリスクがあります。

以上が、体外受精の保険適用に関するメリットとデメリットの例です。ただし、具体的な状況や立場によっては、そのメリットやデメリットが異なる可能性があるため、個々のケースに応じて適切な判断をすることが重要です。

⇒ここまでが返答になりますが、ChatGPTはなかなかの返答をしてきました。ややあいまいな文

章ではありますが、間違ったことは一つも言っていません。

ここからは小生の所感です。

日本の保険診療は誰もが、どこに住んでいても同じ医療が受けられるためにあると理解して今まで診療を行ってきました。今回2022年4月から、今まで自費診療であった体外受精が保険適用となったわけですが、今まで自費診療だった理由として不妊治療の成果は年齢によって大きく異なる～1回あたりの成功率は年齢の若い20代でも50～60%台であること、これが年齢が上がると低下し、40歳を超えると1回あたりの妊娠率（成功率）は20%程度に下降する。一般的な疾患で、最も効果のある人で1回あたり最大でも50～60%という治療効果は決して高いこと、また年齢で成功率が変動するという疾患は珍しいものです。そのため保険適用ではなかったと考えていました。今回は日本国の少子化対策として、当時の総理大臣の鶴の一声で保険適用が決まりました。保険にするぞ！と述べるのは簡単ですが、その細かなルールを決めるのはとても大変で、厚労省は決定から約1年半程度で制度設計を行ったわけですが……。2022年の2月末になってその概要は発表され（制度施行の1か月前）、細かなルールについては不明なまま2022年4月1日を迎えることになりました。なかなか型通りに行かない場合や、こんな場合にどうするのか？など不明な点も多く現場は全国で大混乱となりました。また、使用する薬剤に関しても先発正規品のみが保険適用とされたこと、後発医薬品については保険適用とならなかったこと、保険適用に伴い需要が多くなったことも重なり、薬剤の供給不足（とりわけ新たに保険適用となった先発医薬品）が多発しました。これは診療に大きく影響が出るほどでした。これについては現在もピークは越えたものの今なお続いている状況です。また、保険診療に伴い診療における作業量の増加も多くありました。雑感では1.5倍以上の事務作業の増加があった印象です。個人的には全国の見識のある一部の諸先生と意見交換をしながら、気がつけば1年が経っていたという感じです。今現在も不明な点や疑問点はあるものの、何とか診療を行っています。

不妊治療取り巻く環境はこの数年で大きく変化しています。コロナ禍で関連学会より不妊治療を一時中止することを求める勧告が出たこともありました。コロナが落ち着いてきた頃に体外受精の保険適用化があり診療する我々側も患者側も大混乱となりました。今回初めての制度設計のため、保険適用から2年後に当たる2024年4月（来春です）にはまた大きな変更があるものと予想されます。まだまだ大きな嵐というかうねりの中にいるような状況ですが、舵取りを間違わないように先を予測しながら診療に邁進していこうと思っています。